

1人1台時代の

ICT活用

第18回

全国自治体初、
独自学習eポータルで
個別最適な学びの実現へ

武市正人

(高知県教育委員会事務局教育政策課)

今年3月、高知県は学習eポータル標準に準拠したWebサービス(以下「学習eポータル」という)を独自に開発すると発表した。なぜ自治体が学習eポータルを開発するのか、個別最適な学びの実現にどのように寄与するのか、高知県の取組について紹介する。

高知県の現在地

高知県では、県立高校を含むすべての公立学校で1人1台端末の配備を完了。加えて全児童生徒・教員に同一ドメインのGoogleアカウントを配付して、小学校入学から高校卒業

まで同じIDで運用できる体制を整え、学習データの連続性を確保している。

こうした環境を活かし、高知県では県内の教員・児童生徒が活用できる独自の学習支援プラットフォーム「高知家まなびばこ」を開発した。「高知家まなびばこ」には、児童生徒が自分で学習を選び、学びを進めることができるよう、デジタル教材や学習支援動画を学年別・教科別に掲載しているほか、Googleドライブでは教員向けに教材のPDFファイルやGoogleフォームのデータを共有している。

スタディログ活用に向けた 独自学習eポータルを実装

昨年度、文部科学省が開発している学びの保障オンライン学習システムMEXCBT(メクビット)を1人1台端末から利用するために、学習eポータルを経由する必要があることが発表され、全国の教育委員会では民間事業者が開発したサービスの活用が始まっている。あわせて、民間事業者が提供しているデジタルドリル等の学習ツールについても、学習eポータル経由でアクセスするという考え方が示された。学習eポータルは学校から様々なツールにアクセスするハブの役割を果たすこととなる。

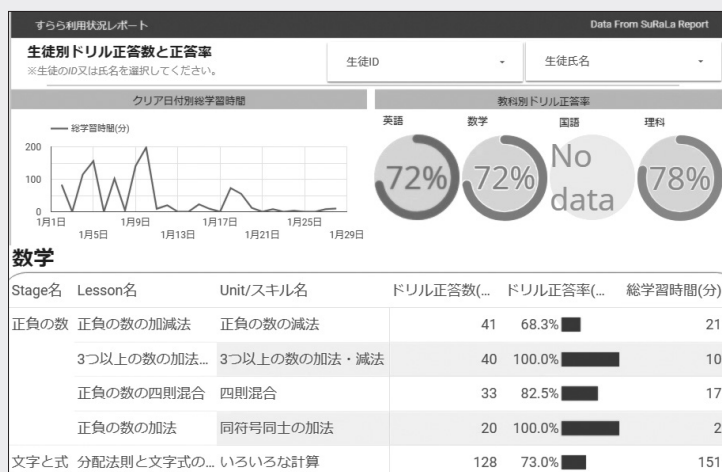
前述のとおり、高知県では全児童生徒に同一ドメインのGoogleアカウントを配付しているため、「高知家まなびばこ」がハブとしての機能を持つことで、運用に必要な転籍処理や

シングルサインオン設定等の負荷を下げられる。さらに、MEEXCBTや各種デジタルドリル等のデータを「高知家まなびこ」に集約し、ダッシュボードに整理して学校現場にフィードバックすることで、スタディログを活用した教員の指導改善につながると考えた。高知県では、こうした機能が県の目指す新しい学習スタイルの根幹になると考え、「高知家まなびこ」を学習eポータル化するという、全国自治体初の取組を進めることとした。

ダッシュボードの具体像

現在開発中のダッシュボードを図に示した。今年度、高知県の一部の県立高校で導入している株式会社すららネットのデジタルドリル「すらら」の学習データを「高知家まなびこ」上で表示したものである。ここでは総学習時間や詳細なカテゴリごとのドリルの正答数、正答率を閲覧できる（カテゴリはすららネット社の定義による）。教員は、こうした情報を学校・学年・学級・生徒個人単位で確認しながら、定着が図られていない部分について、授業の中で丁寧に説明をする、関連する宿題を出す、補習をするなど、次の一手を検討することとなる。データは頻繁に更新されるため、教員が実施した取組の効果が出れば取組を終了できるし、効果が出ていなければ別の手段を取ることが可能である。さらに、生徒も自分で学習状況を確認できるため、自分で弱点を補ったり、どこから学習に取り組むか教員に相談するといったこ

図 開発中のダッシュボード



とが可能となる。このように、ダッシュボードでのフィードバックが個別最適な学習を実現する土台となるのである。もちろん、こうした学習データが外部に漏洩しないことや、保護者・本人の同意のないまま目的外利用されないことは当然であり、さらに入学試験の選考において本来不要な情報が連携され、本人の不利益になるようなことがないよう、十分に注意する必要がある。

今後、1人1台端末の環境を最大限に活用し、データをしっかりと踏まえて子どもたち一人一人に環境を着実に構築するべく、現場のノウハウを取り入れながら検討を進めていく。



(一社) ICT CONNECT 21 ―「教育の情報化」に関係する皆さまにオープンな場を提供し、コネク特することで教育を良くしていく団体。教育とICTについての情報を毎週メルマガで配信中!